

## 編集後記

20世紀最後の年、2000年の幕開けに当たり33巻1号をお届け致します。編集委員会では本誌のレベルアップを求めて種々検討を重ねてきましたが、「邦文誌の最高レベルを堅持しつつ、若手の登龍門として活用頂く」との大原 毅前委員長時代の方針に加え、国際化への道として、本誌の「欧文化」より既存の欧文雑誌との collaboration の方針で論議が進んでいる。すなわち、本誌の欧文化により外国で購読される利点はあっても impact factor (IF) を得ることは当分不可能で、IF のない雑誌への投稿は著者の業績に繋がりに難く、投稿数減が加速すると思われる。また、手術所見や術式に関する微妙な表現が多い本誌の場合、会員が診療の合間に気軽に読める点で邦文誌の利点は捨て難い。幸い、投稿数減に関しては評議員申請時の審査用業績基準で筆頭者の評価点数が16から20点に増やされたので歯止めが期待される。

ところで、高水準化策として(1)原著論文の比率を上げる、(2)特集的なものを採用する、(3)査読方法の改善、などが論議されている。幸い本号でみる限り、症例報告9編に対し原著論文が9編で原著率50%。投稿施設別では大学が原著で7編(78%)、症例報告で3編(33%)。また、特集として卒後教育セミナー5編を掲載したので一応の基準を満たした。

査読状況は、掲載までの期間が原著は9.3か月間で、この間平均1.7回の加筆・修正が行われ、1回のリバイスに平均3.5か月間を要している。また、症例報告でもそれぞれ6.9か月間、1.3回、5.2か月間と差はみられていない。この迅速な査読と著者の適切な対応は雑誌の生命で、理想に近い形で査読が進んでいるが、新規及び再査読を合わせて毎月約10編ほどをお願いしている編集委員の努力には頭が下がる思いである。なお、査読方針としては、投稿規定や内容が本誌に適した論文であることは論を待たないが、論文全体の構成、対象・方法・結果の表現法、考察の展開、図表や引用論文の適切な使用法などにも主眼を置いている。幸い、査読と加筆・修正に要する時間が短縮し、投稿から掲載までの期間が10か月を切った。IF の高い欧文雑誌に投稿する場合も、完成された邦文表現法の修得が基本で、この意味で若手の登龍門として本誌を是非活用して頂きたい、会員諸氏の多数の投稿を期待している。

編集後記は編集委員の輪番制であるが、たまたま区切りの号数に私の順番が巡ってきたので、委員長の立場から編集方針などを紹介し、若干の私見を加えた。

なお、本号より和文目次に筆頭著者の所属施設名を付記し、英文要旨の下に Key words および英文の会誌名、巻数、頁数、発行年を記載することにした。

(委員長：佐治重豊)